

佐久市英語教育推進計画（素案）

佐久市教育委員会

令和8（2026）年1月

目次

1	計画策定にあたって.....	2
2	計画策定の背景.....	3
3	佐久市における英語教育の現状と課題.....	6
4	佐久市の英語教育の目指す姿.....	9
5	施策ごとの目標.....	10
6	基本計画.....	11
7	基本計画における数値目標.....	17

1 計画策定にあたって

(1) 計画策定の趣旨

グローバル化が加速度的に進展する中、文部科学省は平成25年に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表しました。この計画では、小学校中学年からの外国語活動の実施、小学校高学年の教科化、中学校英語教育の高度化等が示されており、この内容を踏まえた学習指導要領が小学校では令和2年度から、中学校では令和3年度から全面実施されています。

本市では、これらの大きな変革を受け、令和4年度に策定した「佐久市教育振興基本計画」において、施策の方針の一つに「急激な社会変化とグローバル化に対応した教育の推進」を掲げ、英語教育の推進に取り組んできました。

しかしながら、令和5年度の全国学力・学習状況調査における市立中学校3年生の英語の結果が全国平均を下回るなど、国を挙げた大きな変革に十分対応できていない現実があると考えています。

そこで、様々な社会情勢の変化や、学校における英語教育に係る課題に対応し、本市における小中学校の英語教育をより着実に充実していくため「佐久市英語教育推進計画」を策定します。

(2) 計画の位置づけ

この推進計画は、「佐久市教育振興基本計画」を踏まえ、本市の英語教育の推進・充実を目的として、小中学校の英語教育における具体的な方策や施策を示したものとします。

(3) 計画期間

計画期間は、令和7年度（策定の時）から令和11年度までとし、佐久市教育振興基本計画（計画期間令和5年度から令和8年度まで）の改定及び学習指導要領の改定に向けた国の動向（中央教育審議会に対して文部科学大臣は令和6年12月に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」を行ってしています。）も勘案し、適宜改定等を行うこととする。

2 計画策定の背景

本計画を策定するのに当たり、英語教育をめぐる社会情勢の変化を整理します。

(1) 英語教育に係る社会情勢の変化

ア 更なるグローバル化の進展

交通手段の発達だけでなく、ICT技術の進展により、グローバル化が急速に進展する中、外国語、特に国際的な共通語である「英語」によるコミュニケーション能力は、一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたり様々な場面で必要とされることが予想されています。

また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の終息とともに訪日外国旅行客数は飛躍的に回復・増加するとともに、少子高齢化に伴う労働力人口の減少などを背景とした、外国人労働者数の増加も顕著化しており、日本に住んでいても、英語を使用する機会は増えていくことが予想されています。

今後、本市において、市が発展していく中において、世界との距離はますます近くなり、人・モノの交流は頻繁になっていくことから、英語は世界と繋がるツールとして、英語によるコミュニケーション能力は、このグローバル化社会を生きていくために必要とされる能力として、それぞれ身に着けることが求められています。

イ ICT、AI技術の急激な進化

近年、AIをはじめとする新たな技術が飛躍的に進化しており、こういったテクノロジーを使いこなす、活用していく能力も必要となっています。

特に、生成AIを活用した自動翻訳機の開発も進んでおり、手軽に質の高い翻訳が可能となってきています。

しかしながら、新たなものを生み出す創造力や発想力、またそれを具体化するために欠かせない他者とのコミュニケーション能力は、人間にしかできないものであり、これからの英語教育においては、自己を確立しつつ、違う文化を持つ他者を理解・受容し、自らの考えを積極的に発信できるコミュニケーション能力を身に付けることが求められています。

ウ VUCAの時代の到来

現代社会は、多様な社会変化が同時に起き、特に災害や新型コロナウイルス感染症のパンデミックによる社会変化のような、予測不可能な未来がこれからの社会の本質的な特徴であるといえます。

このようなVUCA (Volatility (変動性)・Uncertainty (不確実性)・Complexity (複雑性)・Ambiguity (曖昧性))の時代を、生き抜いていくには、一人ひとりが望む未来を自ら示し、切り拓き、作り上げていく必要があります、この時には、言語による壁をなくし、世界中の人々とコミュニケーションをとりながら、これからの時代何が必要なのか、世界とともに考えられる力を身に着ける必要があります。

(2) 国における英語教育の動向

ア グローバル化に対応した英語教育改革実施計画

文部科学省は、平成25年12月に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を公表し、初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図るとしています。

本実施計画では、英語教育の目標を、小学校中学年では、「英語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験することで、コミュニケーション能力の素地を養う」、小学校高学年では、「読むことや書くことも含めた初歩的な英語の運用能力を養う」、中学校では、「身近な事柄を中心に、コミュニケーションを図ることができる能力を養う」とし、小学校高学年では教科型での授業の実施、中学校では、授業を英語で行うことを基本とし、内容に踏み込んだ言語活動を重視するとしています。

イ 現学習指導要領

文部科学省は、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を踏まえ、平成29年3月に新たな学習指導要領を公示し、小学校は令和2年度から、中学校は令和3年度から現在の学習指導要領が全面実施されています。

本学習指導要領では、小学校中学年では外国語活動を行うこととし、その目標を「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働か

せ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成することを目指す」としていません。

また、小学校高学年では、外国語を教科として行うこととし、その目標を「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」としています。

更に、中学校では、外国語科の目標を、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指す」としています。

(3) 佐久市における英語教育について

ア 佐久市における英語教育の取組

本市では、少子高齢化による人口減少、情報化社会、グローバル化や多極化、そして地球環境問題などがこれまで以上に進行することが予測されるとともに、先行きが不透明で、将来の展望が非常に困難な時代を迎えようとしている中、数々の教育課題に適確に対応するため、令和4年度に本市の教育施策の方向性を総合的かつ体系的に示す、新たな「佐久市教育振興基本計画」を策定しました。

この中において、新たな学習指導要領に基づき大きな変革の時期を迎えた英語教育についても、その施策の方針を「急激な社会変化とグローバル化に対応した教育の推進」とし、小中学校の英語教育を推進するための行動計画（本計画）の策定やALT更なる活用、英語教育を通じたコミュニケーション能力の育成、英語を取り入れた体験活動の実施などに取り組むとしています。

3 佐久市における英語教育の現状と課題

次に、佐久市における英語教育の現状と課題を整理します。

(1) 英語力について

まず、令和5年度に行われた全国学力・学習状況調査においては、中学校3年の英語におけるすべての領域について、本市は全国平均を下回る結果となっています。

特に、本市の生徒は「話すこと」、「書くこと」を苦手とする傾向があり、英語で発信（アウトプット）する力に課題があると考えられます（全体を通した課題）。

次に、文部科学省が行っている英語教育実施状況調査では、本市における英検3級相当のレベルに達している生徒の割合は、全国と比較して低い状態となっています（授業改善における課題）。

また、英検等の外部試験を受けている生徒については、全国より英検3級以上を取得している生徒の割合（市：約73% 全国：約61%）が高くなっていますが、受験している生徒の割合が低く、保護者も含め英語を学ぶことへの必要感が持てていないことが考えられます（生活環境における課題）。

更には、こういった調査の結果など客観的なデータに基づく授業改善の取組などがまだまだ浸透していない現実があり、今後の市全体、学校ごとの取組に生かしていく必要があります。（授業改善における課題）。

表1 中学校生徒の英語力の状況（%）

	内 容	佐久市	長野県	全 国
A	外部試験（英検等）を受験したことがある生徒	21.7%	38.9%	45.7%
B	Aのうち、CEFR A1レベル相当（英検3級）以上を取得している生徒	15.8%	24.8%	27.8%
C	CEFR A1レベル相当以上の英語力を有していると思われる生徒	12.5%	29.9%	24.5%
D	B+C	28.2%	54.7%	52.4%

修正No.①（出典：文部科学省 令和6年度英語教育実施状況調査）
※本計画における現況分析のため、参考値として示します。

(2) 授業における言語活動について

文部科学省が行っている英語教育実施状況調査では、本市における授業における英語による言語活動の時間の割合は、特に中学校において、全国と比較して低い状態となっています。

新たな学習指導要領に則した指導がまだまだ浸透していない状況が伺えます（授業改善、小中連携、教員の指導における課題）。

表2 授業における、児童生徒の英語による言語活動時間の割合（％）

	内 容	市	県	国
1	（中学校）50%以上の時間、言語活動を行っている学校	52.4	89.4	75.1
2	（小学校）50%以上の時間、言語活動を行っている学校	92.9	93.4	94.4

修正No.①（出典：文部科学省 令和5年度英語教育実施状況調査）

(3) 小中学校における連携について

新たな学習指導要領において、小学校で英語が教科化されたことにより、英語教育においても小中の連携が重要となっています。本市では、中学校区内で教員が互いに授業を見合う取組や、小中学生間で英語での手紙のやり取りを行う取組などを実施しています。

しかしながら、小学校、中学校間で英語教育の指導方針や到達点が十分に共有されておらず、中学生になって急に英語が難しいと感じる生徒もいるなど、引き続き連携した取り組みを進めていく必要があります（小中連携における課題）。

(4) A L Tの活用について

本市では、現在9名のネイティブスピーカーであるA L Tを雇用し、チームティーチングによる授業を全ての小中学校で実施しています。

日本の生活に不慣れなA L Tもいることから、A L Tコーディネーターを配置し、授業等に集中できるよう生活支援も実施しています。

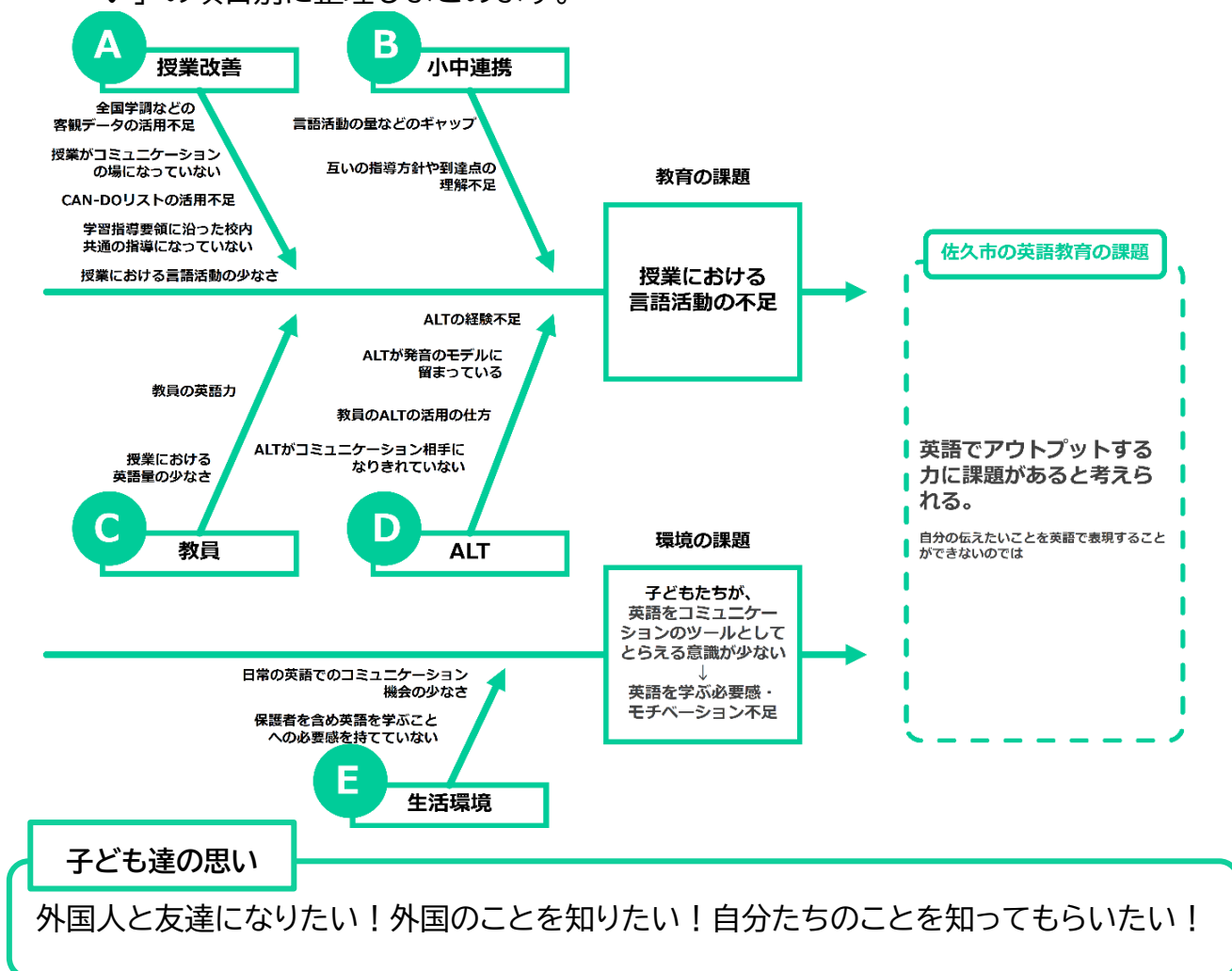
児童生徒の言語活動の相手となることや、そもそも子どもとの接し方等、経験が乏しいA L Tもいるため、より効果的な言語活動を中心とした授業ができるよう、研修などA L Tの活用についても取り組んでいく必要があります（A L Tにおける課題）。

(5) 子ども達の外国に対する思いについて

令和5年度全国学力・学習状況調査においては、「外国人と友達になったり、外国のことについてもっと知りたいと思いますか」という問いに、小学6年生の約73%、中学3年生の約67%が、「日本やあなたが住んでいる地域のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたいと思いますか」という問いに、小学6年生の約82%、中学3年生の約65%が、当てはまる、または、どちらかといえば当てはまると回答しており、この結果は全国の平均と同じか、それを上回るものであり、外国人と接する機会が少ない本市の子ども達も、潜在的に外国の人と仲良くなりたい、知りたい、または自分たちを外国の人に知ってもらいたいと考えており、この子ども達の思いを大切にしていく必要があります。(子ども達の思い)。

(6) 現状と課題の整理

本市の英語教育における現状と課題をAからE及び「子ども達の思い」の項目別に整理しまとめます。



4 佐久市の英語教育の目指す姿

ここまでまとめた、佐久市における英語教育の現状や課題から佐久市の英語教育の目指す姿を定めます。

佐久市の子ども達の思い

外国人と友達になりたい！一緒にゲームやスポーツがしたい！
⇒世界の人々とコミュニケーションをとりたい（考えを理解したい）！！

外国に行って現地の生活を知りたい！世界遺産を見に行きたい！
⇒世界（国、人や文化）を知り学びたい！！

世界中の人に自分達を知って欲しい！私の思いを聞いて欲しい！
⇒自分の考えや思いを多くの人に発信したい！！知ってもらいたい！！

佐久市の英語教育の課題

英語で自分の思いをアウトプットする力

英語は世界への扉であり、子ども達は本能的にその先を見たい、行きたいと考えている（子ども達の思い）。でも、英語で自分の思いを伝えられない、表現できない、コミュニケーションが取れない（佐久市の英語教育の課題）。英語が子どもの未来の可能性を狭めているのでは。



子ども達の本来持っている純粋な思いを育み、それを英語で発信（アウトプット）する能力、伝え合う能力を育てることが、子どもたちの未来の可能性を世界に広げていくスタートになることから、佐久市立の小中学校における英語教育の目指す姿を下記のとおり定めます。

佐久市立の小中学校における英語教育の目指す姿

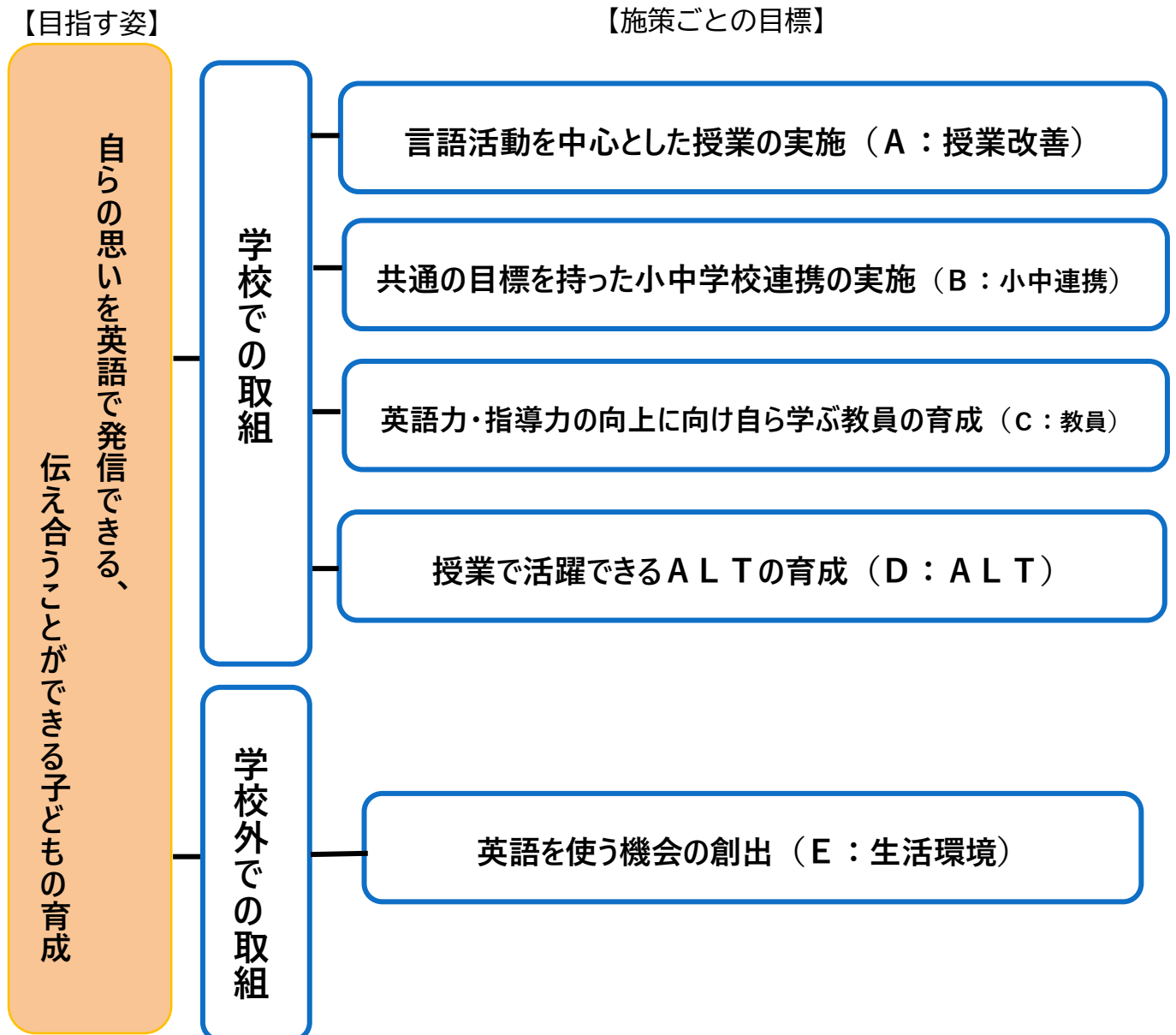
自らの思いを英語で発信できる、伝え合うことができる子どもの育成

5 施策ごとの目標

(1) 施策ごとの目標

佐久市の英語教育の目指す姿を実現するため、佐久市における英語教育の課題ごとに施策の目標を定めます。

また、それぞれの施策に立案、実施においては、ただ英語を教えるということではなく、英語を使って私はこうしたい・こうなりたいという児童生徒の思いや、その思いを実現するために必要なコミュニケーション能力を育むことに視点を置くよう努めます。



6 基本計画

次に、A～Eまでの施策ごとの目標を実現するための基本計画について、下記のとおり定めます。修正No.⑥運用にあたっては、本計画に定められた事項に留まらず、各学校の英語教育の推進における日々の実践を尊重し、小中学校の教員をはじめとする現場の声を聞きながら進めます。

(1) 言語活動を中心とした授業の実施（A：授業改善）

児童生徒が英語で自分の思いを発信（アウトプット）する力を育てるには、修正No.②児童生徒が英語に興味・関心を持ち、自ら見通しを持って取り組める授業にしていくことが必要です。言語活動を中心とした授業について、具体的な取組を以下のとおり示し、授業の改善を進めます。

- ア 修正No.②明確な lesson goal の設定と修正No.③feedback の実施
- 修正No.②単元の最初の時間には lesson goal（単元の目標）を明確にし、児童生徒自らが見通しをもった学習ができるようにします。また授業の最初には、Today's Goal（授業の目標）を共有します。
 - 授業では児童生徒が相手を意識した言語活動の時間を設けることで、相手とつながる良さを実感できるようにします。
 - 児童生徒が自らの学びがわかるように、修正No.③授業の終わりに feedback（学習のふりかえり）を行い、次の授業や lesson goal（単元の目標）に向けた見通しが持てるようにします。
- イ small talk や帯活動の継続と充実
- 授業開始時に英語のリズムを作るために、small talk を繰り返し行い、児童生徒が自分の考えや思いを表現するなどの活動の時間を確保します。

ウ AIアプリ、デジタル教科書やヘッドフォンなどの利用による効果的な練習や学習ができる環境づくり

- ・ AIアプリ、デジタル教科書やヘッドフォンなどの利用により、**修正No.5** 児童生徒が全体でも個別でも効率的な発話や発音の確認など反復（繰り返し）学習ができるようにサポートする環境を検討します。

エ 言語活動が活発になるような学習形態の工夫

- ・ ペアやグループ活動の学習形態を見直すことで、児童生徒が英語の得意、不得意に関わらず、言語活動に取り組みやすい学習環境を整えます。

オ **修正No.7** 小学校高学年から英語検定など外部試験の受験の奨励

- ・ 児童生徒の英語への学習意欲の向上につなげるために、外部試験を通して、自分の英語力を客観的に把握できるように英語検定などの受験を推奨します。

(2) 共通の目標を持った小中学校連携の実施（B：小中連携）

修正No.⑧ 小学校で学習した表現を大切にしながら、児童生徒が中学校の学習内容に慣れていくように、小学校3年生から中学校3年生までの7年間を通した小中連携を図ります。

ア 小中学校の学習内容の相互理解（**修正No.⑨**校種間交流）

- ・ 児童生徒が相手を意識して学んだことを発信できるように、中学校区の小中学校において、手紙やビデオレターなどを交換します。
- ・ **修正No.⑨** 特に、ギャップの生じやすい小学校6年生から中学校1年生入門期までにおいて、中学校での学習のイメージを持ちやすいように出前授業を行ったり、外国語活動、外国語等の授業の相互参観を実施したりすることで、児童生徒の実態に合わせた授業について小中学校教員の相互理解を深めます。

イ 小学校から中学校につながる small talk の会話の**修正No.⑩**継続

- ・ **修正No.⑩** 小学校から中学校まで small talk を継続して行い、小学校では児童が即興で対話することの楽しさがわかるようにします。また、中学校では生徒が対話の楽しさに加えて、対話の内容が増えていくことの楽しさを意識できるようにします。

ウ **修正No.⑪**佐久市 CAN-DO リストの運用

- ・ 小学校3年生から中学校3年生までの間を通して、どのような力を身に付けるのかを、教員も児童生徒も理解できるように「佐久市 CAN-DO リスト」を運用します。小学校中学年の「聞く・話す」から、小学校高学年及び中学校の「読む・書く」活動に段階的に進めるようにします。

(3) 英語力・指導力の向上に向け自ら学ぶ教員の育成 (C:教員)

英語教育の推進には、授業を担当する教員の英語力・指導力が非常に大きな鍵となります。言語活動を中心とした授業を行う中で、**修正No.13**児童生徒が英語での思考モード（集中状態）を途切れさせないようにする教員の指導力が求められます。

ア 佐久市内外の先進校の授業視察の実施

- ・英語教育の先進校の授業視察を行い、言語活動を中心とした模範的な授業を参観することで、指導力の向上を図ります。

イ 指導力向上のための研修の実施

- ・英語授業担当者部会や佐久市学事職員会外国語活動・外国語委員会と協力し、指導力及び英語力向上に関わる研修を実施するとともに、授業力の向上に効果的な教材や指導方法等の情報を収集し、その活用に努めます。

ウ 小学校英語専科教員等の充実

- ・より質の高い英語授業の提供を目指し、小学校英語専科教員の体制強化に努めるとともに、同時に、英語教育における市費学力向上支援員などの配置を検討します。

エ 英語担当指導主事による授業の巡回指導

- ・英語担当指導主事が小中学校におけるALTも含めた英語の授業を参観し、指導や助言、サポートを行います。

(4) 授業で活躍できるALTの育成 (D:ALT)

児童生徒が英語を聞く、話す力を身に付けるためには、外国語活動を開始する小学校3年生から、より多くのネイティブスピーカーの英語に触れる時間を確保し、関わりを持たせていくことが必要です。教員と連携した効果的なチームティーチングができるようにALTの育成に努めます。

ア ALT研修の実施や生活のサポート

- ・英語担当指導主事が中心となり、年間を通じたALTの研修を行い、英語教育の改善及びALTの生活全般にわたる支援を行います。生活の支援に当たっては、ALTコーディネーターも協力して行います。

イ ALTの増員

- ・児童生徒がより多くの授業で英語に触れるようにするために、ALTの増員を検討するとともに、教員との打ち合わせや児童生徒との関わりの時間を確保します。

ウ ALTリーダーの育成

- ・経験豊富なALTに、ALT研修の立案や講師、新規ALTのメンター（相談や指導役）の役割を与えることによって、実践を通じたALTリーダーの育成を進めます。このことによって、ALTの資質や授業改善や、学校や教育委員会事務局との円滑な情報共有を図ります。

エ チャレンジタイムの実施

- ・チャレンジタイム（複数のALTが1校に集まり授業や修正No.15授業以外での活動を行う佐久市独自の事業）を学校の希望に応じて行い、他のALTの授業の方法、児童生徒への対応などを研修する機会を作ります。

(5) 英語を使う機会の創出 (E 生活環境)

学校外の実践においても、地域に住む外国人との交流や異文化に触れる機会の中で、英語でのコミュニケーションを通じて、児童生徒自らが、英語を学び、発信（アウトプット）したいという思いを実感できるようにしていくことが重要です。これらの機会を積極的に創出し、児童生徒がより多く英語に触れられるように努めます。

ア 地域に住む外国人や海外の学校との交流

- ・来日しているALTの家族や地域在住者などの学校外の外国人との関わりや、海外の姉妹都市との交流など、異文化交流を行う機会を作ります。

イ 地域英語協力者の活用

- ・英語に精通している地域在住者に、「地域英語協力者」として小学生の英語授業に参加していただき、児童の英語学習のサポートや、より多くの発話の機会を作ります。

ウ English Camp in Saku の開催

- ・自然の中での活動を通して、外国人講師やALTなどと英語でコミュニケーションをとり、英語を身近に感じ、親しむきっかけをつくり、学習意欲を育てます。

エ **修正No.16** 佐久市で行う国際交流事業の情報提供

- ・佐久市で行う国際交流事業は、外国の文化や言語に触れるとともに、日本の文化を外国の方へ発信できる良い機会です。これらの事業について、小中学校へ向けた積極的な情報提供を行い、より多くの児童生徒が関わる機会を作ります。

7 基本計画における数値目標

A～Eまで基本計画の達成に向けて、その進捗状況を客観的かつ定量的に把握し、評価するために、下記のとおり数値目標を定めます。

A 言語活動を中心とした授業の実施

成果指標	実績値 (令和6年度)	中間値 (令和9年度)	目標値 (令和11年度)
CEFR A1レベル（英検3級）相当以上の英語力を有していると思われる生徒の割合	28.2%	35.8%	43.5%

文部科学省 英語教育実施状況調査結果の数値とする。

（英検3級相当以上の取得者+英検3級相当の英語力を有すると思われるもの（%）の計）

目標値の設定：英語教育推進計画策定に向けた取組を始めた令和5年度時点の長野県の同割合

B 共通の目標を持った小中連携の実施

成果指標	実績値 (令和7年度)	中間値 (令和9年度)	目標値 (令和11年度)
校種間交流の実施回数の割合 (手紙・ビデオレター及び出前授業の実施)	71.4%	78.5%	83.3%

中学校区における小中学校間の校種間交流の実施校数の割合とする。

⇒手紙等実施 21校中21校（100%）/出前授業の実施 21校中9校（42.8%）=30/42（71.4%）

目標値の設定：手紙等21/21校・出前授業14/21校（中学校と同地区の小学校1校ずつ）=35/42

C 英語力・指導力の向上に向け自ら学ぶ教員の育成

成果指標	実績値 (令和7年度)	中間値 (令和9年度)	目標値 (令和11年度)
英語指導主事による授業の巡回指導	20回	25回	30回

英語指導主事による授業の巡回指導の回数とする。

⇒巡回指導を春期1回、秋期1回の1校あたり2回、小中学校計42回の実施が理想（100%）

目標値の設定：小学校、中学校での実施回数30回（30/42校 ≒71.4%）

D 授業で活躍できるALTの育成

成果指標	実績値 (令和7年度)	中間値 (令和9年度)	目標値 (令和11年度)
チャレンジタイムの実施	7校	9校	11校

目標値の設定：小学校9校、中学校2校の計11校（11/21校 ≒52.4%）

E 英語を使う機会の創出

成果指標	実績値 (令和7年度)	中間値 (令和9年度)	目標値 (令和11年度)
地域英語協力者の授業参加校	4校	5校	6校

目標値の設定：英語教育推進計画策定に向けた取組を始めた令和5年度の実績値6校